

「感謝と努力」

2020 年度 部長 看護科 3 年 6 組 坂井瑞都

「人間的にも成長できる部活」という言葉は、何年も変わらず掲げている部のモットーです。この一文にはすごく深い意味が込められていると私は思っています。それは、練習をすれば技術面は伸びるけれど、人間的にも成長するには本気で自分と向き合い、当たり前のことを当たり前に行うことができる必要があるということです。例えば、誰かが率先して動いたり大きな声で挨拶や返事をしていたりする光景に対して、この人のここがすごいから真似しようと思いついたところで、私を含め、ほとんどの人が自分の言葉に責任を持つことが難しく、結局のところ3年間で技術面は成長しても人間的には成長できなかったという人の方が大半だと思います。私は1年生の頃、部活動勧誘演奏を見に行った時、ホルンパートが1人もいませんでした。中学の延長線に入った高校の吹奏楽部は、中学校の吹奏楽部とは全く別物と言っていいほど違っていました。部活動が終わったあと、毎日ほとんどの先輩たちは20時くらいまで自主練習しているのが当たり前で、私も先輩が全員残っているから残る、という今になって考えれば自発的な目標もなく20時くらいまで練習をし、そして朝の練習も先輩たちの後についていくように一緒に練習しました。しかし、それが習慣化していくうちに、私の中で意識が変わっていくのを感じました。基礎練習があつてパート練習がある。パート練習で合わせたことを全体の合奏で活かす。そして、合奏で指摘されたことを放課後練習で潰していく。合奏は譜読みの時間ではない。実際に先輩たちと練習していく中で、当たり前のことをしっかり行うことの大切さを改めて再認識することができました。初めは自主的な放課後練習ではなかった私ですが、次第に放課後練習や朝の練習をしないと何か足りないと感じるくらい、自主練習が楽しくなってきました。なぜかという、放課後練習をしていると残っているメンバーとプチ合奏をしたり、たわいのない話をしたり、入部当初は全く話をしていなかった同級生たちや先輩方、先生と次第に絆が深まり、放課後練習こそが部活動の醍醐味だと知ったからです。朝の練習は、頭がすっきりした状態で自分自身に向き合える貴重な時間でした。あの頃の私は、ただただ先生や先輩達が敷いてくださった、創り上げられたレールの上を進んでいくだけで必死だったのですが、2年生になり、後輩が入部してきた頃には、私は「今まで以上に、頑張っている人が損をしないストイックで楽しいメリハリのついた部活にする」という目標を自分の中で作っていました。

私がまだ、新型コロナウイルスの存在すら知らなかった2年になったばかりの春。部員はたった9人。このままじゃコンクールどころか曲が成り立たないと思い、必死で新入生を勧誘しました。コンクールの曲を決めた時には、部員は15人。歴代の中でも最少人数でのコンクールへの挑戦でした。私は、人数が少ないことに対して焦る気持ちと、自分がなんとかしたいといけないという思いで空回りをしてしまい、いろいろな人に感情をぶつけてしまうこともありました。しかし、たくさんミーティングを行い、努力を重ね続けた結果、3年連続最優秀賞受賞、四国大会出場を果たすことができました。あの時、コンクール会場で先生やみんなと嬉し涙を流し抱き合ったことを今でも覚えています。

月日は流れ、数々の本番を迎えていく中で、次第に部員同士の絆は深まっていきました。しかし、予想もしてなかったことが起きました。1年ほど前に突如現れた新型コロナウイルスが、私たちの当たり前の日常を全て変えてしまったのです。

無事3年生の先輩を送り出すことができていた3月、新型コロナウイルスに全ての日常が奪われました。部活動だけでなく、学校が休校になる緊急事態となり、誰も先が見えず、気持ちは落ち込んでいくばかりでした。そんな中でも矢野先生が提案してくださったテレワーク演奏は、みんなと久々に繋がることができとても嬉しかったです。学校が再開し、日々の生活が戻りつつある今も、あの頃の活気あ

る吹奏楽部は戻ってきていません。しかし、私は起きてしまったことをダラダラ引きずるのは良くないと思ったので、自分からまた新しくスタートさせようと、先生をはじめ、部員にも話を持ちかけ、ぶつかり合いながらも前とは違う新しい活気あるチームを作っている真最中です。私は自分から持ちかけた行動に責任を持ち、やり遂げてから後輩にバトンを渡したいと思っています。そのためにも、自分が納得するまでは、みんなと精一杯向き合っていきたいと考えています。そして来年のコンクールに出場して、4年連続の最優秀賞を、さらには全国大会出場を勝ち取りにいきたいと思います。

今年の3年生は、新型コロナウイルスに部活動や学校行事で活躍する場を多く失いました。しかし、矢野先生の尽力により、看護科専攻科生も来年のコンクールに出場することが可能になったので、このチャンスが無駄にしないように、日々「今日が最後になるかもしれない」と思いながら練習をします。後輩たちが「出場部門が変わっても先輩たちと一緒にコンクールに出たい」と言ってくれたことには心から感謝しています。しかし、いつ当たり前の日常が奪われるかは分かりません。1日1日を本当に大事に過ごしていこうと思います。

入部したばかりの頃は、全く話もしていかなかった同学年のみんな、お互いに本音をさらけ出さず、ぶつかることを避けようとしてきた関係は、本気で部活動に向き合った時に、はじめて大きく激突し、その個性を受け入れ、認め合うことができました。大きな壁を乗り越えて、私のわがままにもついてきてくれてありがとう。本音を言い合うことでお互いを尊重し合える部活動には、私の居場所があり、幸せです。そして、顧問の矢野先生が私を変えてくれたと言っても過言ではありません。苦しい時、辛い時、諦めて放り出そうとした時、いつも先生が、励ましてくださいました。部員一人ひとりが自分自身と向き合い、何が足りていないのかを見出すことができたのは、矢野先生が諦めずミーティングを重ね、自分の弱さと向き合う時間を作ってくださったおかげだと思っています。また、副顧問の先生方をはじめとする多くの先生方の温かい声掛けや、ずっと応援してくれた家族にも改めて感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとうございました。そして、本当に充実した3年間を送ることができたのは、この飯山高校吹奏楽部のみんなと出会えたからです。さらに、あともう1年ここにいられることがとても嬉しく、みんなともっと吹奏楽ができることが最高に幸せです。私の第二の原点である飯山高校吹奏楽部。部員全員がそう思えるように、これからも走り続けたいと思います。

